

俳人 成田千空研究会

千空研究

第17号

大初日鵬のごとのぼりくる

—千空句版画—

藤田 健次

この句は、千空さん22歳の時の作である。東奥日報社発行『月刊東奥』昭和18年1月号に掲載された。太田耳動子選の俳句部門で一位となり賞をいただいている。22歳にしてこのスケールの大きさ。ベテラン選者も舌を巻いたにちがいない。鵬（おおとり）とは、翼の長さ三千里、一度に九万里を飛ぶというから、とても絵にならない。それで、同じ想像上の鳥である鳳凰（らしきもの）に置き替えてみた。架空の生きものを描くのは本当に難しい。

（版画家・会員／八戸市）



目次

大初日鵬のごとのぼりくる

—千空句版画—

藤田 健次

1

千空の受賞歴をめぐって(2)

齋藤 美穂

2

蛇笏賞・詩歌文学館賞

西谷ともえ

4

『現代俳句集Ⅱ』について

千空先生に俳句を習う④
師と何ぞや

世良 啓

5

〈千空点描〉鼠は、千空の泣きどころ

4

〈作品鑑賞を読む〉

⑮寒中の紫蜆寸志とす

黒田 杏子

6

⑯暗緑を出て白光の那智の滝

小原 啄葉

6

〈成田千空資料再録〉⑯

千空 雪の俳句

7

お礼とお知らせ

評伝・合本句集の概要

11

『天地人』に千空句集『人日』引用

11

寄贈感謝・会員名簿・北極星

12

千空研究会の事業

① 詳細な年譜の作成

② 千空俳句データベースの作成

③ 関係資料の収集

④ 関係者からの聞き取り

⑤ 会報『千空研究』の発行

⑥ 『評伝 成田千空』の刊行

⑦ 『合本 成田千空句集』の刊行

千空の受賞歴をめぐって(2)

蛇笏賞・詩歌文学館賞

齋藤 美穂

俳人協会賞から蛇笏賞へ

平成十(1998)年四月十三日の夕方、俳句教室の仕事を終えて帰宅した千空のもとに蛇笏賞授賞の知らせが舞いこみました。「蛇笏賞は及びがたい賞だと思っていましたから、電話で通知を受けておどろきました」「受賞のことば」「俳句」平成10年6月号。

選考結果では、「負の意識が流れているが卑屈ではなく、むしろそれをエネルギーとしておのずからなる諧謔性を示す。津軽の土壌はなかなか豊かであると思う」(藤田湘子)。「一部批評にあった風土俳句といった印象ではなく、むしろ地味で誠実な人間の実感そのものの生活詠、その人間味の厚さに感銘したと言った方がよい」(森澄雄)など、作家の人間性に信頼を寄せた選評が並びました。

千空は七十七歳、前年一月に出版された『白光』(今日の俳句叢書41 角川書店)は、結社「萬緑」の四代目選者に就任した平成元年から六年間の作品から三六九句を載録した第四句集です。「この六年間、私自身の句作だけでなく、同人や会員の全作品を注視するあらたな体験が、私自身の句作の指針ともなったと思う」とあとがきで述べているように、俳人としての新たな生活から生まれた句集によって権威ある賞を受賞したことは、千空に

大きなよろこびと希望をもたらしたことでしょう。

「昭和から平成」という時代の変わり目に俳人協会賞を受賞し、『萬緑』選者を引き継ぐことにもなった千空は、周囲の注目と期待が高まるなか想像を超える多くの仕事を抱えていました。全国的な受賞は俳句の世界だけではなく一般市民にもその存在を知らしめ、千空は地域の教育・行政団体やジャーナリズムからの講演・原稿などの依頼を引き受けることになりました。一方、青森市の俳句講座(RAB学苑)に続いて弘前市の俳句教室(NHK文化センター)、五所川原市俳句教室(働く婦人の家)の開設、朝日新聞青森版の文芸欄や陸奥新報社の企画・今月の秀句の担当のほか、県内外の俳句大会の主選者の依頼など、千空は結社を超えた指導者として信頼され、必要とされました。

『萬緑』の選者として果たすべき毎月の仕事(数千句からの選句と句評執筆)は上京する列車内や宿泊先での早朝にも休みなくすすめられました。全国各地の句会から青森に戻った足で俳句教室へ向かい、帰宅後には店を片付けて個々に寄せられる俳句の添削や寄贈句集の感想を書きました。平成二年から五年にかけて断続的に書かれた日記には超人的とも思える仕事ぶりが綴られています。

ぐっすりねむって目がさめる。かなりきついスケジュールをこなしているのだが、さほどこたえない。もう70才なのだが身心健在とおもわれる。自覚症状がない点がむしろ怖いことかもしれないが、わが生涯で今がいちばん充実しているように思われる。不思議だ。／萬緑の「樹頭の花」の選と選評はラクではな

いが楽しい面もあり、終ると実にさわやかな気分となる。この仕事は徹底的に取り組むので、たといまちがいがあっても悔いなしである。

日々の記録からは生活や心身の不安を払拭して俳句の道に邁進するようすが伝わってきます。初心者から中央で活躍する俳人まで多くの人と交流し、全国各地の景勝地を訪れる機会をとおして「よい勉強になった」という一方で、以前のよう句作に専念できる時間は限られていきました。しかし何事にも隔たりを持たない安定した心のあり方を求めてきた千空は、こうした状況から次の目標を掲げて俳句に反映させようと考えていたようです。

夜、金色の三日月が西に傾き、それに三つの星が添うかたちで西空に消えるまでを見る。実にはやいスピードで地球が廻っていることを実感する／平明で繊細。現代俳句になにかをつけ加えるだけの、新しい俳句を思う。

(平成3年日記)

平成五年五月のはじめ、多忙な日々の合間に俳句仲間の車で飯詰を訪れたときの感動を、「ひさしぶりで母郷の山影に触れる。山桜が咲き、鶯が鳴き、山田に水が張り、ダムの水も青々と澄んでせいせいする。三十句できる」と千空は日記に綴っています。

「素晴らしい先輩方、友人に恵まれた。長く俳句を続けてきたが、まだ理想とする俳句には到達していない。山や川、自然、人さまざまなものの恩

によって文芸が育つという意味の句があるが、命ある限り、その恩にこたえるような素晴らしい句を作っていきたい」(青森の受賞祝賀会「東奥日報」平成10年7月6日)。「青森はすぐれた芸術家を輩出している土地で、目標に不足がありませんが、当年とって七十七歳で、きびしい道が想像されます」(前出「受賞の言葉」)。

俳人協会賞受賞から八年、津軽という母星を周回する軌道を見失うことなくひたむきに俳句へ打ちこむ日々を積み重ね、蛇笏賞という栄えある光に再び照らされた東北の星は、一句の成就を目ざして燃え尽きる覚悟を示していました。

道はまだ遠く―詩歌文学館賞受賞―

平成十三年、千空は傘寿を迎えました。第五句集『忘年』(花神社 平成12年)のあとがきには「今度の句集出版で作品の手持ちが零になった。身軽くなってこれから自在に俳句をつくり続けてゆきたい。年を忘れて」と記し、『萬緑』の代表や蛇笏賞選考委員就任などの重責を担いつつ、新たな境地を模索していました。蛇笏賞受賞前後の平成七年から十一年までの作品から「精いっぱい」の四百句を載録したという句集『忘年』は第十六回詩歌文学館賞を受賞します。

岩手県北上市にある日本現代詩歌文学館は日本で唯一の詩歌専門の文学館です。ここでは明治から現代にいたる詩歌関連の資料を全国から収集・保存しています。詩歌文学館賞は詩人・歌人・俳人、及び詩歌専門誌や文芸誌の編集者など、約一千人からのアンケートで推薦された候補作品を参考にしてその年の最も優れた作品集に贈る、と規定されています。俳句部門の選考委員代表・阿部



日本現代詩歌文学館の外観
(右)と受賞作展示コーナー
の千空句集『忘年』(上)



た理由を明かしました。

千空は受賞のことばのなかで、「蛇笏賞を受賞してから、発想は自由に、表現は自然体にところがけたが、納得できる作品が少なかった」と述べ、また別の対談では「今度の句集では、まあまあ見られるというのは、十句ぐらいしかないですね。(受賞は)『忘年』の十句に対してくれたんだと思っています」(千空対談「中寒」と村次郎を語る『文芸あおもり』148号)とも発言しています。

平成十六年、雑誌『俳句文芸』(天満書房)の企

画「句集から100句」で、千空は『地霊』二十二句、『人日』二十三句、『天門』二十五句、『白光』二十二句、『忘年』八句を自選しました。

春の雪空の静かさ降るやうに

四温かなベン肝胝一つ芽のかたち

種馬の光体となり夏来る

煙さへ朝の生きもの田水張る

太陽と父と田植機快調に

会ひたくて広がる村の踊の輪

生国や眼も熱くなるじやつぱ汁

大雪をぶちまけてまだ降る気かな

千空のことばを借りるとすれば、この八句が詩歌文学館賞を受賞させてもらった、ということになるのでしょうか。

平成二十七年、春浅い北上を訪れた私は学芸員の案内で千空が出席した贈賞式や記念旅行のアルバム、館内の受賞コーナーを興味深く見学しました。宮沢賢治をはじめ松尾芭蕉・石川啄木・斎藤茂吉など多くの文人が足跡を遺した北上の地に、津軽の俳人・成田千空の名は作品とともに刻まれています。

生涯最後の句集『十方吟』(角川俳句叢書38 角川書店 平成19年3月)は、「作ろうというより、浮かんでくるようになった」という自然体の作品集となりました。出版祝賀会で「私の俳句はこれから」(陸奥新報)平成19年4月16日)と述べた八十六歳の千空には次の句集への意欲があったということです。句集や受賞歴は来し方に置き去り、俳人・成田千空の道ははるか先へと続いていったのです。

(千空研究会調査研究員／五所川原市)

『現代俳句集Ⅱ』について

西 谷 ともえ

『現代俳句集Ⅱ』は昭和31年に現代俳句の会の編で琅玕洞より刊行された。これは合同句集ではあるが、千空さんにとって、中央で刊行された初めての句集である。三年前の昭和28年に第一回萬緑賞を受賞したことで「萬緑」同人以外にも広くその名が知られた事による入集だと思われるが、その経緯について何か手がかりはないかと調べてみた。

『現代俳句集』は全二巻で、現在国立国会図書館と神戸大学図書館の誓子・波津女俳句俳諧文庫に存在が確認できる。国立国会図書館本はデジタル公開されており、主要公立図書館で閲覧が可能である。千空さんの作品「罇」47句は第二巻に入集している。これには赤城さかえ、金子兜太、楠本憲吉、香西照雄、佐藤鬼房、鈴木六林男、高島茂、高柳重信、田川飛旅子、津田清子、島海多佳男、成田千空、野田誠、原子公平の十四人の句がこの順で掲載されている。アイウエオ順の掲載のようだ。高柳と島海は多行形式俳句であるため、それぞれ20句しか掲載されていない。その他の作家たちは一ページあたり5句で十ページの50句が基本のようである。赤城が29句、金子、楠本が30句六ページしかないのは、巻末に評論として三人の文章が掲載されているからであろう。諸事情により割り当てが減らされたか、自粛したものと思われる。奥付を見ると著者代表に金子兜太、印刷

者に高柳重信、発行には楠本憲吉の名が挙げられている。楠本憲吉は慶應義塾大学俳句研究会（慶大俳句）設立者で琅玕洞の経営者である。楠本の書いた巻末の「昭和俳壇史²」は第一巻からの続きであるが、国会図書館蔵本は落丁本でページが不連続な上に二ページかけているのが残念である。神戸大学蔵本で確認できることを期待する。

『現代俳句集』第一巻もみてみよう。前年の昭和30年に刊行されたこの本には金子兜太、森澄雄、原子公平、津田清子、鈴木六林男、佐藤鬼房、高柳重信の句がこの順で掲載されており、神田秀夫、楠本憲吉、島海多佳男の評論が巻末に掲載されている。著者代表は神田秀夫、発行者は高柳重信である。発行所は現代俳句の会となっており、所在地は埼玉県戸田町の高柳宅となっている。二冊の本を刊行した現代俳句の会であるが、高柳が主宰した会であろうと思われるが、詳細は不明である。昭和63年以降平成前期まで『俳句ボエム合同選集』を刊行した同名の団体との関係も不明である。この二巻にはどちらにも序やあとがきがなく、収録のコンセプトを知る手がかりが途絶えてしまったので、編集の中心にいたであろう高柳重信のこのあたりの状況を書き加えておく。

高柳は東京の出身であるが、戦後埼玉県戸田に移転した。父の影響で若くから俳句をやり、早稲田大学入学当初は、「睦月」（太田耳動子主宰・青森市出身）の支部であった早大俳句研究会に所属したが、徐々に飽き足らなくなり早大俳句会を創立した。「縷紅」（大場白水郎主宰）、「日月」（加宮貴一主宰）「寒雷」（加藤楸邨主宰）、「不易」（田島柏葉主宰）、「鶴」（石田波郷主宰）などに投句する一方で、新興俳句系の「琉拍」東京句会に出席する。

【千空点描】

鼠は、千空の泣きどころ

昔は鼠がたくさんいた。天井を走り畑を荒らしまわっていたから、農民だった千空さんは見なれていたはず。それなのに、大の鼠がらいだったという。

鼠を見ると、「市子、ネズミ、ねずみ」と言って逃げまわったとは、妻市子さんの話。

鼠捕り器にかかった鼠は水漬けにしたが、千空さんは怖がって近寄らなかったで、これも市子さんの仕事だった。偉丈夫の千空さんが、小さな鼠にあわてふためいている様子は想像するだに可笑しい。弁慶の、いや、千空の泣きどころだったのだ。

〈佐〉

富沢赤黄男の処女句集『天の狼』に惹かれた。金子兜太らとともに前衛俳句の旗手と目された。富沢赤黄男を擁して『薔薇』を創刊。戦後は谷川洵の筆名で詩・短歌・散文を、恵幻子の筆名で評論を発表するなど、俳句以外の創作にも熱心であった。昭和23年、楠本憲吉、加藤元重、野原正作等と俳句同人誌「弔旗」を創刊するが二号で終刊となる。昭和25年「黒彌撒」（翌年六号で終刊）刊行。昭和27年第四句集『罪囚植民地』の作品を書きはじめ。高柳は『現代俳句集』第一巻には「罪囚植民地」21句を第二巻には20句の計40句を掲載している。第二巻刊行と同年の昭和31年『落子・伯爵領および罪囚植民地よりなる黒彌撒』という作品集を同じ琅玕洞より刊行した。過去に刊行し、

絶版になっていた「落子」「伯爵領」の抄と併せて『黒彌撒』と題された「罪囚植民地」は晴・曇・雨・風・雪の五部立てで全56句からなっている多行俳句集である。後書きに自身こう記している。(旧字は新字に改めた)

○「罪囚植民地」の作品は昭和二十七年から三十一年にかけて書かれた。これは、私の二十九歳から三十三歳の間に相当する。この期間は同時に、私が編集した俳句雑誌「薔薇」の揺籃期と重なりあっている。私は、もっぱら「薔薇」の育成に力をそそぎ、好むときも好まざるときも、俳壇との密接な応酬を余儀なくされた。したがって、私は、作品を書くためよりも、「薔薇」編集者として多忙であった。この期間に、私を取り巻く社会の動きは、きわめて数多くの激昂を惹起する事件に満ちていた。しかし、私は、あくまでも、私自身に沈着であることを要求しつづけた。その間に俳壇では、いわゆる三十代作家の顕著な進出があった。彼らは火のように燃えて、作品を書いた。私は、彼等にいくらかの共感をおぼえながら、なお且つ、水のごとく沈着でもありたいと、いよいよ深く誓うところがあった。彼等が火のごとく人の心を焼くときに、私は水のように人の心を焼きたいと思つた。(以下略)

ここに書かれた顕著な進出があった三十代の一人が千空さんであろう。また、別の一人は金子兜太かもしれない。萬緑賞を受賞するという顕著な進出をした千空さんはまさに「火のように燃えて」作品を書いていた時期だ。

「萬緑」以外の中央での千空さんの評価がわか

るのではないかと『現代俳句集Ⅱ』を調査したが、判然としなかった。現存資料も二冊と少ないのも気になる。千空さんの蔵書にも確認できなかった。当時の書評のようなものも今の所見当たらない。更なる調査が必要である。

(県立青森高校教諭・元県近代文学館副室長／青森市)

千空先生に俳句を習う④

師とは何ぞや

世 良 啓

2002年11月4日、月曜日。五所川原市にある菊ヶ丘公園で、師弟句碑の除幕式が執り行われた(『千空研究第4号』の泉風信子氏の「草田男の二重性」にはこの除幕式の様子や関係者の挨拶が記録され、二つの句の関係性が分析、解説されている)。

冷たい雨が蕭々と降っていた。

初夏には花菖蒲の名所として知られる菊ヶ丘公園。その花菖蒲は明治神宮から株分けされたものだ。すぐ近くに国の重要文化財の旧平山家がある。立派な江戸時代の木造建築で、ここは板垣(旧姓平山)直子の生家でもある。

長部日出雄が棟方志功を描いた評伝小説『鬼が来た』は、昭和14年に東京で開かれた青森県出身の在京芸術家座談会の様子から始まる。そこに参加した太宰治が「怖いね」と言った評論家が板垣直子だった。彼女は日本初の女性文芸評論家で、弘前中央高校から日本女子大学に進学、東京大学の第1回女子聴講生という経歴の、文学、美術、

哲学に通じたスーパー才媛。齒に衣着せぬ評論が人気で、多くの文化人と交流があった。

平成2年、この菊ヶ丘公園に千空さんの代表句の碑ができた。

大粒の雨降る青田母のくに 千 空

12年経ち、隣に中村草田男の碑が並んだ。千空さんが蛇笏賞を受賞した記念にだという。

炎熱や勝利のごとき地の明るさ 草田男
だが私はこの句について何も知らなかった。草田男についても「降る雪や」や「万緑の」などの数句を知るのみ。あつるつるした教科書に閉じ込められた俳句や俳人たちのよそよしさ。ページに余白が多い分だけ、敷居が高く高尚な気がして、怖さや近寄りがたい世界という感じだった。学生時代に俳句を作った記憶がなく、入試に出題されにくいという理由で高校の授業でも詩や俳句の時間は割愛されることが多かった。正直、生徒に俳句をどう教えたらいのか指導書を読んでもさっぱりわからなかった。

そんな私でも、並び建った二つの俳句を見たと、まるで最初からそれと意図していたかのように見事に対句になっていることに気づいて驚いたものである。どちらも昭和22年、終戦直後の作で夏の句。太陽の「炎熱」に対して「雨」、灼け尽くされた都会の焦土の乾きと、大粒の雨を受け苗を育む津軽の青田の豊かな水、赤と青(緑)の色彩の対比……。日本は敗けたが市井は「勝利のごとく」明るい。その奇妙な明るさを描いた四五歳の壮年の草田男と、日本が破れて残った「母のくに」の飯詰の田で恵みの雨を浴びて立つ25歳の青年の千空。焼け跡の都会と、青々とした初夏の津軽。父性的な動の句と、母性的な静の句。どちら

にも戦争が終わったことで生まれた明るさがあり、人生の再生が歌われているように感じる。

その印象は除幕式の千空さんの挨拶や、娘の中村弓子さんのお話を聞いているうちにますます強くなった。

さらに弓子さんの目線で語られる父・草田男の思い出を聞いているうちに、自然と脳裏にはあの有名な一句が浮かんだ。

万緑の中や吾子の齒生え初むる 草田男

父親になったばかりのひとりの若い男が、最愛の娘のあどけない口元に真っ白な歯が生え始めた瞬間を、驚きと感激を胸に、目を輝かせて見つめている。その時やっと名句と言われるこの一句に流れ続けるみずみずしい生命賛歌……芽生えはじめた青葉と赤ん坊の命の息吹、緑と純白の色彩のコントラスト、自然と人間の連環……そうしたものがいっぺんに自分の中に流れ込んできた気がした。この日を境に私は五七五、たった17音の向こう側に、それをつくった人間がいて、手応えを感じられるようになった。

あの日、81歳の千空さんはどんな気持ちだったのだろう、と今になって思う。草田男は82歳で没しているのだ。

当時、千空さんは草田男が創刊した俳誌『萬緑』の選者をしていた。地方在住のまま中央の有名な俳誌の選者をするということは非常に珍しく、当時は異例のことだったという。さらに地方で暮らしながら俳句の芥川賞といわれる蛇笏賞を受賞したことも画期的だった。あえて東京に行かず、俳句も文化もこの北の地から発信していこうという千空さんの決心と生きざまがあの師弟碑に秘められているようだ。

折しも青森では空前の縄文ブームが続いていた。1994年にクリの六本柱跡のある三内丸山遺跡が発掘され、これまで西日本中心だった日本の歴史観が根底から変わり、はるか縄文の時代から、青森には世界に誇る豊かな歴史があったことが証明されたばかりだった。

一方で1995年に阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件、2001年にはアメリカで同時多発テロが起きていた。やっと冷戦が終わったというのに、21世紀が始まった途端に、新たな闇、きな臭さがじわじわ忍び寄っていた。

もし「青田」の一句だけなら敗戦後の空気を知らないままでも味わうことはできる。しかし「炎熱」の句と並べることで、時代背景が一気に立体的に迫ってくるように思うのは私だけだろうか。師弟句碑は千空さんの平和を願う遺言とも読める。11月は5日と19日の2回、弘前で千空さんの俳句入門教室があった。句碑建立のせいとか、このとき千空さんは草田男の思い出もよくお話ししてくださった。

「中村草田男という人はさ、いっくら手紙を出してもね、めったに返事をよこさない人でしたね。しかし返事は出さないが、ちゃんと読んでいて、いつも心の中にある。そんな人でした」

それからしばらく考えて、つぶやいた。

「この年になるとね、『師とはなんぞや』ということ、それを、考えてばかりいます」

『師とはなんぞや』という言葉の重みは、今、そのまま私自身の問いになっている。

こうして私が出会った頃の千空さんには、いつも人間探求派、中村草田男の影が寄り添っていた。

(文筆家・高校教師／藤崎町)

【作品鑑賞を読む】⑮

寒中の紫蜺寸志とす

『白光』を頂いて、一気に読了していた。一句一句に作者のたましいが宿っていて、その言霊が読み手を魅きつけるのである。

たまたま、昨年平成八年七月七日に、成田千空という作家と親しくお目にかかる機会を与えられた。俳人協会三十五周年大会が北陸金沢で開催された折である。

円卓で隣の席を頂いたので、この俳人の俳句に対する考えを私は取材した。

その発言はきわめて明快かつ含蓄に富み、上等な赤葡萄酒をじっくり愉しんだのちのごとき余韻が快ちよかった。

一度さっと読み了えて、もういちど、すこしゆっくり読み返してゆく。一句ごとに、金沢でじかに耳にさせて頂いた作者の音が響いてくる。どの句も作者の肉声となるのである。その人の地声で詠み上げられている作品群の中から、私はあえて掲出の一句を選んだ。

寒中のの上五がゆたかである。紫蜺はかなしいまでに美しい。そして気品を堪えている。寸志という日本語に日本人のくらしのかたちがこめられている。一字一句に作者の気が通っている。そして重たくない。調べはシンプルで切れている。いいなあと思う。

黒田 杏子

(『俳句』平成9年6月号)

千空 雪の俳句

太宰治『津軽』には、津軽の雪（東奥年鑑より）として、

こな雪 つぶ雪 わた雪 みづ雪

かた雪 ざらめ雪 こほり雪
が挙げられている。

千空句の雪もまた多彩である。句集から雪の句を抄出した。

【あ行】

朝明けの雪を踏みゆくころざし
足形片々雪に紅染む紙の供華
穴釣に修羅の吹雪となりにけり
安心を許さぬ月日雪を押す
いかづちの告げて雪ふる天地かな
生きざまの自転車一つ雪ざらし
生きて来て生き継ぐ雪野尿熱し
五十路の坂は上りか下りか雪深し
一円相雪解はじまる樹の周り
いつ死ぬる身とな思ひそ雪明り
いつよりのわが尉の眉雪しきり
犬一匹町も野中の吹雪ざま
浮鴨の彩羽ほのかに小雪ふる
浮雲や田のいろにじむ湿り雪
臼売りの雪に吹かるる吹かれ抜く

羽の国の平らをつくし雪降り

馬が大事の雪垣ならめ雀群る

海よりの風の地吹雪地藏堂

裏口になほ残雪の頑固もの

永別や雪山淡く裾を引く

蝦夷地群像はげしき春の雪となる

艶笑譚雪ゆ曲々林檎の木

大いなる雪の歓声信濃より

大空に力をもらひ雪卸す

大鳥居くぐる道あり雪敷けり

大雪の夜は森のごと熟睡妻

大雪のあと月光の村となる

大雪のあと大粒の星ひとつ

大雪を煙としたる機械かな

大雪をぶちまけてまだ降る気かな

小田に雪雀ら空をさまよへる

鬼追ひし夜や大乱の雪となる

お祓ひのやうに二月の雪が降る

おふくろら老いて盲ひて雪の国

女兒のひとり遊びは雪を摘む

おむすびは心のかたち雪のくに

おんのはの死んでしまへば雪の原

【か行】

開戦日雪の足跡数知れず
顔に降る雪こそばゆく雪まつり
篝火の多感のほむら雪祭
掛乞は物乞に似て雪かむる
かた雪の明るみに入り子を呼ぶ母
堅雪に鳥獣の糞山泰し
堅雪の目ざめきらめく雀ども
刈葦の合掌立ちに雪積み

川風の鴉をふやし雪となる

癌告知負ひゆく雪と氷かな

消えがてに塵土の雪となりにけり

奇禍なきや雪達磨夜々雪肥り

きさらぎの雪の羽毛を被て妻よ

君はいま火葬寸前雪の花

君は亡く雪降りつもる身の周り

強暴に除雪車を駆る貌一つ

銀日輪飛雪を凌ぎゆくものに

杭を打つ響と光氷雪に

俱会一処根雪をけづる瀬音して

供華挿して雪潤びけり山の墓

雲間の日雪間の草や父帰る

鯉茶屋の雪吊いくつ美しや

声発し赤子も雪の子の仲間

声良しの声を励みに雪の村

心行く雪代川に棒流れ

この道や雪は未踏の白さにて

子別れのことは短く雪をんな

こんこんと雪降る村のお葬式

滾々と雪ふる夜空紅きざす

【さ行】

叫びたい子等に深雪のつくり山
叫びたい子を叫ばしめ雪真新
残留の泪大粒雪の果
敷石も砌もまろく雪間草
死にがたく生き堪へがたく雪螢
死苦は神の拷問雪の常夜燈
師弟の碑雪ふるときは雪の中
地吹雪に眉上げし日も過ぎしかな
地吹雪の顔もてつどふ仲間かな

地吹雪の彼方の灯影いのちなり
地吹雪の吹き入る隙間南無父よ
地吹雪の十字砲火をゆく子かな
地吹雪へ頭突きの子等や登校路
地吹雪や白玉楼をまのあたり
地吹雪を衝く難民の痛みもち
下相野百戸に鬱の雪残る
朱蠟燃え花の嫁婿雪国に
春雪を握りしたたる拳保つ
春雪を踏みためらはず蝦夷にあり
殉ずるも背くも一樹雪嵐
成仏七年大雪晴の岩木山
新雪の蔵王かがよふ天に君
新雪のしろがねの道学校へ
新雪や繭の白さの藁ロール
審判台いまも地上に雪降り
縋るもの柱・妻の手雪の家
杉山の矢絛に雪新しや
青年に雪白光の不倒距離
瀬音して月日はじまる深雪かな
雪原に到り双手を挙げて会ふ
雪原に土よりの杭うらがなし
雪後にて天翔ける腋鮮しや
雪後にて金環の眼の鰻あがる
雪後にてりぼんのやうに鷗舞ふ
雪中花いつ死ぬる身の歩きをり
雪中梅はつはつ咲いて蕊匂ふ
雪嶺よたたかふ若きナースたち
雪嶺を西に韃の太息
線香の杉いろとぼす深雪かな
草木と根を張る藁屋雪起し
存念の藁家ありけり雪さはに

【た行】

大丈夫蔵王は雪の輝きに
手力男雪を卸して余り有り
食べてゐて食べるものなく雪が降る
父といふ大いなる身の病みて雪
血ばむ地やうようと雪ふりつもる
猪口一つ残りてをかし雪の墓
鎮魂の雪降りつもる山河かな
妻が辺のちび鉛筆や雪の果
天眼や雪はあまねく降り敷けり
天を頼み人を頼みて地の吹雪
天ゆ雪膨れ漲る飯の泡
戸一枚向うは荒野雪起し
東京に雪降りて濃き仲間かな
遠き代の擦文のごと山に雪
溶けてまた降る雪明り我ら会ふ
飛ぶ鳥の雪原つづき祝婚へ
友がりへ越えゆく雪と氷かな
とりけもの地吹雪に消え祖の村
鳥礫雪しろの脈八方に
鳥は鳥の断片を追ふ雪山河

【な行】

なかぞらに縦の声湧き雪ふれり
なきがらも雪野も平ら朝あけに
並木みな踊るかたちに雪が降る
根の雪に昼の燈一つ鎮守の燈
農幾代の墓穴ねばつく雪と土
のど飴のみどりを口に雪解どき

【は行】

羽音して二羽とぶ鴉雪晴れむ

白日の雪原を行く凌はれゆく
白鳥に風雪迫る鮮らしや
白鳥に雪の天網静かなり
白鳥の歩きて雪を汚しけり
白骨や茫々として雪迅し
鹵応へのいぶりがつこも雪の果
鹵を抜いて雪ふはふはと身の周り
初雪のうすく刷く道お嫁入り
羽あるごと雪原日和わがものに
母老いて消えんばかりや雪螢
母子見え夜明けのやうに吹雪熄む
母といふ憂ひの生身雪螢
母と距つ雪やぶ薔薇の根を宿し
母の歩幅の敷石つづり雪間草
春の雪空の静かさ降るやうに
日の薄目雪の村々見捨てゆく
日めくりを一枚剥ぎて矢の吹雪
飛天界いま綿雪の舞ひつづく
人が死にまた人が死に雪が降る
人つひにひとりぼっちの雪の家
人の日の日がなわた雪さざめ雪
人葬り野づらは雪の張りつよし
人葬る正しさにあり雪ふる手
人を呑み人を吐く夜の吹雪かな
百歳の彼方は雪の野づらかな
百歳の柩の軽く春の雪
氷雪に珍の火を焚き働ける
氷雪やはたたくものに波と火と
氷雪や柩ずしりと家を出る
風狂の神もあるべし花に雪
風来の一と夜屋から雪こぼれる
文殻はわが屍と燃やせ雪螢

降りしきる雪をにらみて獅子頭
降り遊び降り荒む雪雪一と日
降る雪のおのれはづみて子の仲間
降る雪の舞ふ雪となり花となる
降る雪の巴に梵天歌

降る雪や生家に玉の赤ん坊
降る雪や音読の書は立てらるる
臍すこし曲りて雪の男ども
返本の屍を束ね雪敷けり
防雪林吾を持つ母のいまも貧し
防雪林沖のごとくに荒ぶ日ぞ
防雪林層々我ら健在に
防雪林日を得て青き家郷かな
茫々と雲のつらなり雪囲ひ
保線夫ら片手を高く雪の果
本然の日と雪の原ここ母郷
凡人浄土丸太も雪にうもれたる
梵天の幸はふ国や霏々と雪
梵天の町や五色の雪が降る

【ま行】

前髪にお降りの雪朝の子
魔吹雪となるうぶすなの天地かな
まるめるは雪ぐにの瘤屯せり
満目の雪野や魚を固乾しに
身寄りなき身とな思ひそ雪の母
岬の空羽毛をこぼし小雪ふる
水着緊むる雪国の肌まぎれなし
蜜ひそむ栗の菓子も雪のころ
密林のごとく雪降る火の捨て場
見ゆるもの雪のみの日の一書得つ
みんな夢雪ふりつつ雪だるま

目つぶしの雪降りしきる津軽三味
盲目のははの永眠雪明り
喪の明けや雪踏みにじむ土の色
諸腕に柩の重き山に雪

【や行】

焼薯屋佇つ歳月はすべて雪
山祇の雪に踏ん張る紅鳥居
山は雪地に出稼ぎの大鞆
山行かば雪解さざめくさざれ石
屋根は大きな翼のごとく雪晴るる
矢吹雪の野山を越えて行くひとり
闇に現れ雪に紛るる女の荷
雪新し山を越える山鴉
雪起しくらやみに覚め島のやう
雪起し鳴りこもりをり杓枕
雪起し鳴りわたりをり夜の肋
雪起し古き火筒の音し熄む
雪起し約束ひとつ脅かす
雪卸しあぐねて幾日人に疎し
雪をんなわらへばすこしきつね顔
雪搔きの朱のひらひらと生きてゐる
雪囲暮れてざらつく十の指
雪囲ひ天日淡くやすらへり
雪国にこの空の青餅の肌
雪国に彼岸の美し造り花
雪国の暁闇を発つ汽笛かな
雪国の晴こそ深し白の市
雪国の夜の白みくる青みくる
雪来るか風切あらき岬の鳶
雪ぐるみ飛ぶ坂の子ら午前の樹
雪ごもる雀の声と我が燈近し

雪さらに白む松籟聞くべかり
雪敷いて西より晴るる天の色
雪霽して合掌の萱廂
雪しまく木にて無念の藁の蛇
雪捲く樹チャイム全音夜の底より
雪しろのゑらぎ流るる峽十戸
雪しろの瀬音や時は人を待たず
雪しろのとどろくところ心立つ
雪しろのとどろくところ舞ふところ
雪しろの二夕尾に流れ村ざかひ
雪しんの檜山杉山雑木山
雪層々死ぬまで歩くつもりかな
雪玉一発したたかに打つドラム缶
雪礫光り掠めし恋の中
雪吊りの高く定まり雲もなし
雪どけ田原網目に乾きつづく縁
雪解笹ささやく山の仏たち
雪解雫念珠粒々石ぶみに
雪解けて顔のふくらむゴリラかな
雪解けのやうな大根おろしかな
雪解水珠紐となり流れけり
雪解靄人かとも見え野良の墓
雪と舞ふ篝の火の粉雪まつり
雪に酔ひ説き伏せられて行くごとし
雪野いまうすももいろに小正月
雪の上に雪舞ふ十三のこはだ鮎
雪の上雞あつまりてくらくなる
雪の産屋蜜ひとさじの燈明るく
雪の踵走る燈あまたよるべなし
雪の起伏野鍛冶ねねち鉄火打つ
雪野照り莎の金の紛れたる

雪の町夜明けのチャイム有め鳴る
 雪の夜の話しだいに尊厳死
 雪晴の天地身近かに山鴉
 雪晴のうちの百里祝婚へ
 雪晴のものの一つに姥の顔
 雪一と日計報を胸にあたたむる
 雪霏々と文を配るもえにしか
 雪深く掘れば祖霊の土の色
 雪ふかくけものみちめく帰りみち
 雪降って解けてまた雪老ホーム
 雪ふるや草の匂ひのくすり箱
 雪帽子馬具屋に忘れ来しと思ふ
 雪眼して寂光界をゆく母や
 雪やぶに火をつつましくお婆さん
 雪やぶは女体の丸さ奥津軽
 雪よ降れ幼女に赤きアノラック
 雪よりも白き骨これお婆あさん
 雪鎧ふ藁塚いくつ過ぎ車力村
 雪割ると仄めくみどり鳩の胸
 雪を削ぐ流れひしめく雀色
 雪を抽く火の日の月日しんとして
 雪を踏み納骨の山振りむかず
 雪ン子のうた産卵の鶏のこゑ
 雪ン子やこの子の母も赤ブーツ
 許さるる諸びと雪の終列車
 赦されしごと新雪の丘に泊つ
 夜稼業の女たちまち雪をんな
 呼べば寄る子づれ白鳥雪のなか
 よみがへるみたまと思ふ雪ましろ
 嫁婿や日から弥生の雪が降る

【ら行】

林中や雪解さわだつねぐらの樹
 老少不定雪ふりつつむ雪の坂
 老ホームいま雪嶺を楯として
 蠟燭をともし姥泛く雪の国
 露天湯や春雪の肌まのあたり

【わ行】

わが死ぬ家きれいに雪を卸しけり
 われとわが千の空から花吹雪
 綿雪のつもるにまかせ葬へり
 藁ロール雪被てあまた子等のやう

「天地人」に千空句集『人日』引用

1月7日の東奥日報のコラム「天地人」に千空句集『人日』が引用された。

五所川原の俳人・故成田千空さんの句集に「人日」がある。人日はきょう1月7日のこと。「人の日」とも。5月5日の端午、9月9日の重陽などと並ぶ五節句の一つだがほかの節句ほどは知られていないかもしれない。昔の中国で人への刑罰を行わない日だったという。▼この日の朝に食べる習わしがあるのが、7種の若菜を入れる七草粥。セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ……と五七五のリズムで覚えている人もいるだろう。千空さんの句集のあとがきには「おふくろの味がする津軽のけの汁もその一種」とある。(中略)
 人の日の日がなわた雪さざめ雪。千空さんの句集にそんな句があった。しばらく寒に耐えての暮らしが続く。

【作品鑑賞を読む】⑥

暗緑を出て白光の那智の滝

「那智山にて七句」の中の二句。那智山は大雲取山、烏帽子山、光が峰、妙法山などの総称。山中には四十八滝があり、那智の滝はその一ノ滝。檜、杉などの鬱然とした原始林にかこまれ、滝はその緑を割って断崖にかかる。遠望すれば白すだれのような美観である。滝は御神体。まさに「暗緑を出て白光」となる。「神なりや魔なりやとどろ那智の滝」「白光の天上天下那智の滝」など、作者の気魄に圧倒される。

那智の滝には秋櫻子の名句、「滝落ちて群青世界とどろけり」があるが、それに並ぶものと言える。秋櫻子の理想美の世界に対し、千空の滝には荘厳な太始の神秘性がこもる。秋櫻子の動、千空の静。

みのらざる稲穂の青さ曳き帰る
 しらしらと夜が明けてある粧の穂
 平成五年の東北は記録的な冷害に見舞われた。「はたらけど／はたらけど猶わが生活楽にならざり／ぢつと手を見る／啄木」。ひとたび冷害に遭うと、農民の多くは出稼ぎに頼らざるを得ない。

「みちのく」という共通の基盤に立つせいもあるが、『白光』一巻には共鳴する句が実に多い。

小原 啄木

〔俳句〕平成9年6月号

お礼とお知らせ

会の目的である評伝と合本句集は、近く刊行の運びとなりました。会員の皆様には心からお礼申し上げます。

三年を予定していましたが、千空の著作が予想外に多く五年の歳月を要しました。今後は、市子夫人からお預かりしている資料を整理し、年内には青森県近代文学館に納める運びとなります。

したがって、会報『千空研究』は、第20号（11月発行）をもって終刊します。まだご執筆頂いていない方は、ぜひ、お早めのご寄稿をお願いします。会報は今後、千空研究の資料として活用されるものと考えられます。

思えば四年あまり前、私の独断で始めた会でしたが、多くの方のご賛同をいただいたことは千空さんの人徳によるものと感謝しています。

私もすでに八十六歳、千空さんが亡くなられた年となりました。間に合ってよかったと、心から思います。ありがとうございます。

俳人 成田千空研究会

代表 佐々木 達 司

評伝と合本句集の概要

成田千空伝 ―大粒の雨降る青田母のくに―

齋 藤 美 穂

はじめに

一章 療養と初学の日々

二章 飯詰村での帰農生活

三章 生涯の師・中村草田男

四章 津軽詩話会の文化活動

五章 人生の範として増田桓一医師

六章 千空のなかの太宰治

七章 五所川原俳句会の誕生

八章 寺山修司の才能に想う

九章 青森県文芸協会理事長となる

十章 金子兜太の作家精神に学ぶ

十一章 青森県近代文学館企画展「成田千空」

十二章 作品は語る

あとがき

別章 妻・市子が語る千空

おもな参考文献

取材協力者

氏名索引

千空句索引

合本 成田千空句集

俳人 成田千空研究会編

地 霊（昭和十八～四十六年）

人 日（昭和四十七～五十七年）

天 門（昭和五十八～六十三年）

白 光（平成元～六年）

忘 年（平成七～十一年）

十 方 吟（平成十二～十八年）

十 方 吟 以 後（平成十九～没年）

成田千空略歴

あとがき

索引

A 5判並製、264ページ

定価 2500円＋税

会員割引があります

どちらも定価2500円＋税（2700円）

ですが、直接お求めになると、

会員は2割引（2160円）、送料無料となります。

予約も承っています。

お申し込みのとき、「千空研究会会員」とお知らせください。

青森文芸出版（文芸印刷）

☎ 0173（35）5323

A 5判並製、264ページ
定価 2500円＋税

寄贈感謝

藤埜まさ志さん（千葉県流山市）

句集『木霊』 角川書店 2700円（税別）

『土塊』『火群』に続く藤埜さんの第三句集。その一句。

千空を恋へば十一月の雪

浅利康衛さん（青森市）『まほろば』12・1・2月号

原稿を募集しています

会報『千空研究』の原稿を募集しています。

第20号で終刊となります。執筆頂ける方はお早めに原稿をお届けくださるようお願いいたします。

1. 調査・研究に関するもの（4000字以内）
2. 回想の成田千空（2000字以内）

締め切り 第18号は4月末、到着順に掲載します。

送り先 （下段発行所、青森文芸出版あて）

*Eメールで送信くださる場合

sasaki@bungei.co.jp

会員を募集しています

会報『千空研究』継続配布をご希望の方は、会員としてご登録ください。会費は年1000円です。

今年の会費をお納め下さい

今年の会費をお願いします。振替用紙を同封しました。なお、左記の会員は納入済みですから、重複しないようお願いいたします。

2019年会費を納入済みの方（敬称略）

葛西幸子、兼平一子、鳴海顔回、藤埜まさ志、
許勢元貞

会員名簿（64名）

〈青森市〉 浅利康衛、荒谷信子、齋藤光子、
佐藤陽子、高森ましら、中嶋義雄、
成田市子、西谷ともえ、野沢省悟、
野村正彦、浜田しげる、未津きみ、
吉田州花
阿保子星、石崎志亥、泉 風信子、
市田由紀子、鎌田義正、後藤 隆、
佐藤 繁、館田勝弘、土田紫翠、
成田圭子、三上弘之
〈黒石市〉 鳴海顔回
〈藤崎町〉 清水雪江、世良 啓
〈八戸市〉 上條勝芳、小林凡石、仁科源一、
藤田健次
〈十和田市〉 米田省三
〈五所川原市〉 会津明郎、荒閑映子、一戸 鈴、
葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、
齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、
佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、
浜田十三、松宮梗子、山内ひろ子
〈板柳町〉 木村玲子
〈中泊町〉 外崎文夫
〈つがる市〉 兼平一子、工藤清泰、中村雅之
〈深浦町〉 草野力丸、山本こう女
〈岩手県盛岡市〉 瀬川君雄
〈茨城県那珂市〉 永山憲子、寺門資子、矢須恵由
〈茨城県水戸市〉 糟谷雅枝、小泉光子
〈茨城県日立市〉 高井まさ江
〈千葉県流山市〉 藤埜まさ志
〈神奈川県横浜浜市〉 許勢元貞
〈大阪市〉 川東郁代

☆北極星☆

○うれしい年賀状をいただきました。

初空や太宰千空五所川原

岩手県の俳人、和城弘志さんからです。「読売俳壇」で成田千空先生に沢山とって戴いた事を懐かしく思っております、とありました。

○千空研究、だんだん面白くなってゆくのが不思議です、こちらは青森市の会員さん。

○千空資料再録は形を変えて、雪の俳句をまとめてみました。季語とは別に、雪の表現もさまざまで興味深いものがあります。

○千空の受賞歴②（齋藤美穂）は、蛇笏賞・詩歌文学館賞の、『現代俳句集Ⅱ』について（西谷ともえ）は資料探索、千空先生に俳句を習う④（世良啓）は、師とは何ぞや、いろんなアプローチがあるもの。

○評伝・合本句集の発行日は3月31日、千空生誕98年にあたる。

○今年は、評伝・合本句集を刊行、資料の整理、会報は第20号で終刊となります。最後の年ですので気を引き締めていきたいと思ひます。よろしく願ひします。

2019年2月20日発行

会報『千空研究』第17号 非売品（会員配布）

発行 俳人 成田千空研究会

佐々木 達 司

〒037-0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版内

TEL 0173-355323

FAX 0173-358414